

論文内容要旨(甲)

論文題名

Reduced prevalence of cardiovascular disease and metabolic syndrome-related disorders among Japanese long-term inpatients with schizophrenia

(長期入院中の統合失調症患者における心血管疾患及びメタボリックシンドローム関連障害の発症率減少に関する研究)

掲載雑誌名

Clinical Neuropsychopharmacology and Therapeutics
2015年掲載予定

内科系精神医学専攻 中村 暖

内容要旨

統合失調症患者の平均寿命は、健常者と比較して有意に短い事が報告されているが、その要因として、統合失調症患者における心血管疾患の合併が指摘されている。また、統合失調症患者では、心血管疾患のリスクファクターであるメタボリックシンドローム関連障害 (MSDs) の有病率が高いことも報告されており、統合失調症に対する心血管疾患や MSDs の発症予防を考慮した治療戦略を確立していく事は、患者の生命予後の改善において急務の課題である。今回我々は、平成 24 年 4 月 1 日時点で昭和大学附属烏山病院慢性期病棟に 5 年以上の長期入院をしていた統合失調症患者 56 名を対象に、入院時～平成 25 年 6 月 30 日までの期間における心血管疾患及び MSDs の有無、BMI の変動、抗精神病薬の種類や投与量等を診療録から後方視的に調査した。また、患者群の心血管疾患及び MSDs の発症率を、平成 22 年度国民健康・栄養調査で得られた一般人のデータと比較した。患者群において、BMI はほとんど変動なくコントロールされており、心血管疾患及び MSDs の発症率は、一般人のデータと比較してほとんどの調査項目で抑制されていた。また、抗精神病薬の定型薬と非定型薬の間で、心血管疾患及び MSDs の発症率に有意差は見られなかった。入院環境では食生活や嗜好品が厳格に管理され、内科的治療も十分に行われていたことから、統合失調症患者における心血管疾患及び MSDs の発症は抑制されていたものと考えられた。また、入院環境では、抗精神病薬の定型薬と非定

型薬の違いが心血管疾患の発症に影響を与えにくいことが推測された。